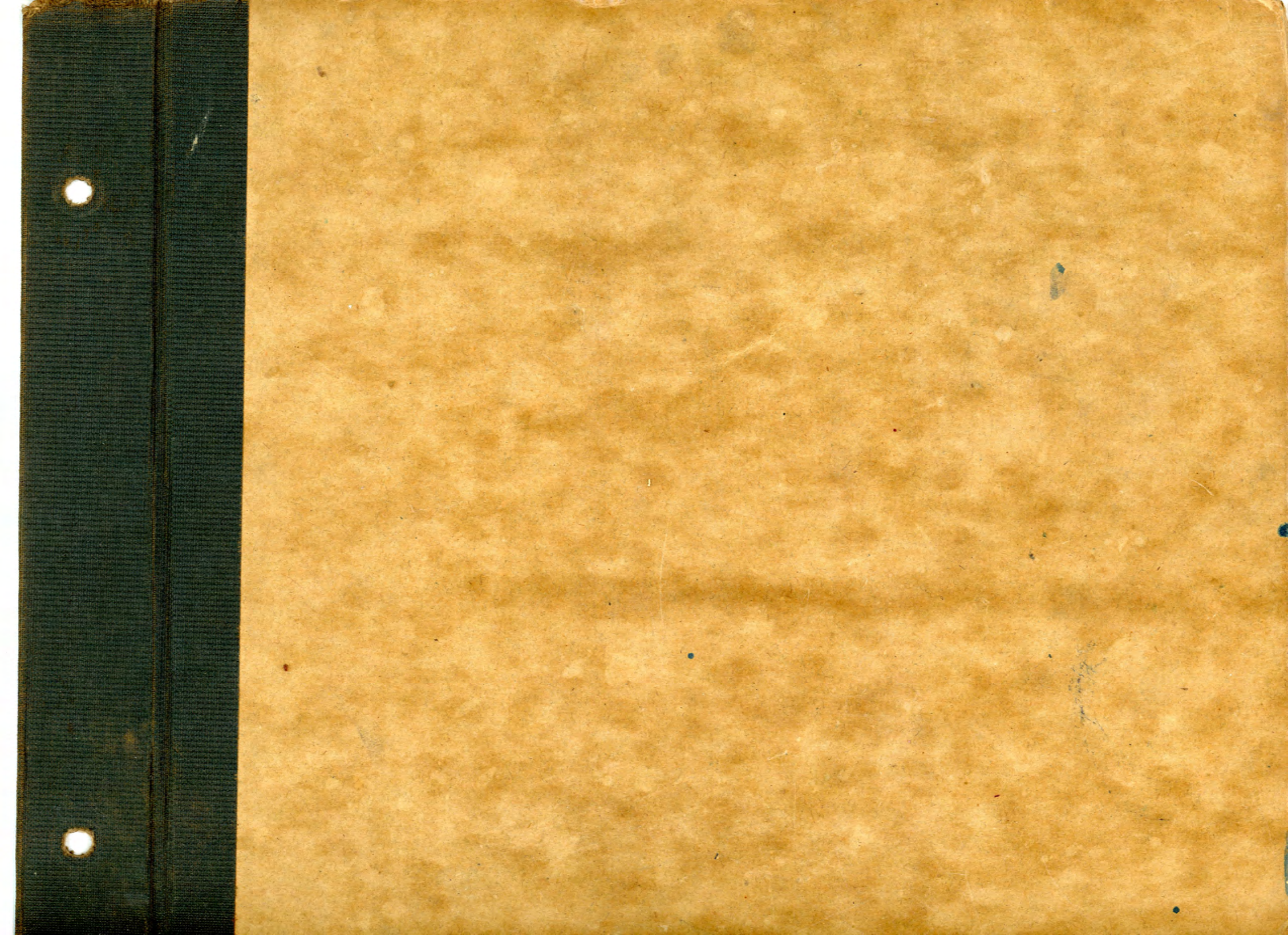




弟

弟の時

肩を
に

自分に眼をさまして居るのを知
つてゐるの

あの計はつきりと聞いてゐた

私は哄笑したくなる

自分で知つてゐるやうで其の實眠
つてゐるんだ

けれど、私自身にも吐いた

俺の生活だつて弟の妬みたいだ

ぞ

目醒ましてゐる積りで實際は

うつら、うつらあのだ

他から見ると

弟の妬みたいに見苦しいに違ひ
ない。

「戯詩」題知らず

彼女は池の面を眺めながら
キャノに乗りたいと
夜は更けて人影は少ない

は余り淋しいんです

そうかも知れんて
俺はくすんたい。

弟と私

林田香村

何遍をしへても

理解しない

——お前はまだ

わからないのか

弟はペンを握つたまゝ

うなだれて涙ぐむ

私もじつと涙ぐむ

——今夜はもう是れでや
すまう！

弟は黙つて首肯く

私はそつと横を向く、

林田香村

の感覺に於ける誤認を、指摘する態度に依つて決定する。要約すれば、觀念と、實際感情の上の、認識錯誤を、化學的に證明する行爲が、即ち鑑賞上の拙論なのである。

◎

却説、内容律表現の言葉は散文藝術にも、當て筈め得ること乍ら、我韻文藝術に取つては、實に、正錯を穿らたる金言なのである。

◎

却説、内容律表現の言葉は散文藝術にも、當て筈め得ること乍ら、我韻文藝術に取つては、實に、正錯を穿ちたる金言なのである。

詩は、それ自體が、すでに韻律的なものなるが故にである。術が、僅に於ける、我

續糾な書る名づくるに過ぎざる
に比して、韻文藝術(主として此處では詩の意義)の領域に於て、春花爛漫たる装を放射して、色、様々に誇競へるに見ゆる。

併し、沿岸の詩人達の何れ

もが、其の持ちたるごころの本質を、意志感情を、遺憾なく發揮し得て、敬愛なる道を辿りつゝあるは、形式・色彩の如何を問はず、吾人、素人

鑑賞家をして一様に悦ばしめ
すには居らない。何物かゞ在
るが、我が移民地の詩人達の
殆ど總てが、詩的對象に向
ふに、想像、觀察、心境轉運
の感覺、等、等、が、錯覺性
を帶たる感覺上の描き矛盾、
描寫に於ての、偶然の混同、
陷つて居るやうである。

吾人の鑑賞上の論點・並に
立場は、斯の點に存する。詩
的觀念を把持する、心的傾向

の感覺に於ける誤認を、指摘する態度に依つて決定する。要約すれば、概念と、實際感情の上の、認識錯誤を、化學上の證明する行爲が、即ち學費上の拙論なのである。

却説、内容律表現の言葉は散文藝術にも、當て筈め得ること乍ら、我韻文藝術に取つては、實に、正錯を穿ちたる金言なのである。

詩としての大切な規範は、心映物象を、感情動を、詩的に直載簡明に説明する事であつて、其説明たるや、詩形の如何を問はず片々たる説明に始終してはならぬのである。それは、直観の曇らざる現實描寫であらねばならぬ。これが結果に於ては、所謂、必然性を帯びる所以となるものであつて、詩の含有する、内律なるものは、技巧、無技巧を云々する諸點に在らずして表現其物に、（中略）太く滲み出で、労働氣、科學的感覚、それ自體である。

詩は、洗練せんれんされたる。ふかい文字を、一の無駄もなく、一の粗雑さうさうもなく、説明し裏附うらつけけ、描寫びやうしていつて、始めて詩としての、高調こうてうされたる。醇化じゅんかされたる、餘韻よゐん嫋々たうたうとして、虚偽きゐの無い詩が表現ひょうげんされるのである。何も、低劣ていじやくなる技巧ぎこうをふるはざるのが、かへつて、無技巧むぎこうの誇りさ、ならざるが如くに、内在律ないざんりつの問題も、自ら消滅しょうめつして來るのである。

吾人が、詩作する上に在つては、常に、其の對象に向かつては、一、點の躊躇もなく、ダン／＼突入して行つて所謂、劍法の不死身の態度となつてこそ、始めて自己の感情意識が、詩の生命となつて流れ出るのである。此場合に自己の持つ、氣分、感情を、決して先入觀念の支配下に、低廻、沈溺さしてならぬのである。他は何ともあれ、自己は、自己の攔んだ、確固たるものを、其有れの儘の姿で、其の周囲の概念關係の壓迫から隔離して表現すべきなのである。

然るに、然るに、我敬愛する太平洋岸の詩人達は自己獨特の境地・視野を踏みにつけてまでも、他の大家の詩風一式に概念意識に阻止され模放と錯覺に落た。外道に迷巡する憐れむべきや、實に、ケラミズの如く太陽に實體を隠さんとする自稱大家達なのである。

吾人は、沿岸新聞文藝欄に現れたる作品に接する毎に一層深き嘆息を洩らさざるを得ないのである。

其の多く裡に於いても、一頭地を抜いて豊富なる内容、生觀・自然觀等を廣汎に取り入れて居て明日を期待すべき詩人として、我加川文一君を推す。氏は、兎にも角にも他の如何なる詩人に比しても、作品を通じて一貫したる思想を持つて居るからである。

此處から氏の作品を、検討する事に依つて、吾人の鑑識論を明瞭にしやう。

何故に、氏は自己の詩的本質を、感覺を、對象を忠實に描寫せぬのか。

何故に、氏の心象、理性的觀察とは、選美なる自然と、意識的に背馳するか。

是、氏が概念に本尊を据へて對象に向ふからである。對象から得る感じより、概念から刺戟される感情の方が遙に強大な力を持つて氏の態度になるからであるかくして氏は心境に置いて既に詩的對象への判斷價值を失つて居る。

例へば、枯草の裡に淋しい浮雲を見るに悲しい。灰色の花には涙流るゝ等、總て事物が、氏の心境には、平面的に、かく憂愁に導くものなるか、果たして然るならば、氏の心境と對象批判とは局限される感情の一部分の範圍にのみ作用し、働くものなるか、氏の詩的判断は時、空を超越して千變一律のに、寸秒の隙も無く、同一軌路を辿るものなるか、否、斯くの如きは則ち、吾人の日ふ詩的性格が、内定意識を無視して、概念關係に、重心を置巨大なる事物の奥を、相を極めようとする錯覺性に基づくものなるは明瞭な事實であらう。

氏は、絶へず持てる所の深き自然への憧憬心も、稀に見る感受性強き才能を互に交錯刺戟して、枯草に、浮雲に、灰色の花に、感情を謳ふ。が茲に驚くべき自己隔着がある。幾多の自然現象に對して、口譯も無く淋しむ印象が、則ちそれである。

同じ富士の峰も、母國を船
出する人々には、甲板に佇
づんで遙に遠く夕雲の裡に消
へざらんとする處を見ては、
そぞろ郷里を憶ふの切なる感

が湧くであらう、それに反し
て故郷に向かふ船の舷に白雪
を戴いたる壯嚴な富士の勇姿
を拜しては深き歡喜に躍るで
あらう。

枯草の裡に伏しても、朝露
を踏む、枯草の野に、宵の道
を逍遙する實感とは、自ら別
ものがあるであらう、いつも
かも淋しい、淋しいである筈
は無いのである。

浮き雲を眺めるにしても、
時間と空間の差は、作者に作
用するに異ひない、更に、灰
色の花を、同様である。

吾人は、應々にして、秋は
悲しい、ひた管、詠嘆する
が、必ずしも、秋でなければ
ば、秋の淋しい感じは持てぬ
ものかと言ふに決して事實は

そうでは無いのである。秋に
言ふ、一個の概念はなくとも
眞夏に於ても、秋の健な、
淋しい實感を、氣分を持つ事
が出来るのである。秋にも春
のやうな、麗しい陽氣を感ず
る、心境にもなる事が出来る
のである。

加川氏が表現する
が如くに、總ての情感が絶へ
ず、一定なものであるならば
支那、朝鮮にては、葬式の折
りに「哀號」「哀號」泣く
職業的泣き役があるが如くに
それは、チヨクトモ、藝術的
要素を持たぬ表現である。こ
云はざるを得ぬ。

要するに、其折り其の場所
に於ての心境は、動的であつ
て少しの沈澁もして居てはな
らない。秋、枯れ草、雲、花

等、等の先入觀念に左右され
て、眞を、紛らして、涙を流
す理由とはならないのである
自由も、懸命も、瀾瀾も、
無く、只感傷性に囚はれて了
ふのは、敢て、この作者に限
らず、詩人としての、藝術家

たる素養の問題に影響する程
幼稚な、詩の鑑賞家は推察
するのである。のみならず、
作者自身も、最も危険な状態
に有るのは明瞭な事實である
これを最近の常套語に要約す
れば作者の生活が停滯して居
る（行詰まりの意）と言ふに外

ならぬ。
安易な感傷は伸びやうとす
る作者の藝術的——致命傷で
ある。

再び一步を進めて
「枯草は淋しい」を、假りに
表現して見ても是では、完全
されたる詩とはならない。な
ぜならば、詩は、評論、隨筆

とは異つて、淋しい、悲しい
嬉しい、等々の文字は餘りに
描象的、概念的、非現實的、
現實的、非化學的、言葉使
ひ（思はせ振）であるからであ
る。さう淋しいか、説明を要
するではないか、甘いなら、
其の甘さが砂糖であるか、

であるか、將た又、戀の甘さ
であるか、吾人は遺憾ながら
著者の甘さが（淋しい）漠然と
して居て、其の感には同感
持てない。併しながら、茲に
注目すべき要點は「蜜の如く
「戀の甘さ」が、決して技
巧として排斥されるべき文字で
ないと言ふ事である。それは

當然「甘い」の言葉使ひが、
不徹底なるが如くに同一な理
由に依るからである。（同一
な説明を要する義として）

以上、簡明な、非化學的な
と言ふ説明によつて領けるや
うに描寫は、化學的でなければ
吾人に何の感興をも湧き起
さぬのである。

更に、「淋しい」「淋しい」
「ミ、わざわざ感傷的な言葉
を使用して迄、一般讀者の感
情を暖めなくとも内容を、忠
實に、藝術的に描寫さへすれ
ば、作者が聲を暖らして泣く
な嘆きな、叫んでも、讀者
は自ら泣く、すゝり泣き或
は嗚咽するのである。

作者の詩作態度が純であれ
ば、ある程度讀者は無意識的に
作者の感情に引き摺り込まれ
る。

最後に此の一文を明確に、
裏附ける意味で、最近吾人の
眼に付いた、二三の詩を批判
して見やう。

羅新十月十二日「詩と蟲」
利平氏の。
蟲——蟲
さびしければ
野の蟲が啼く
之は嘘の極端である。
堪たしいものである。
さびしいか、蟲が啼く
啼くとは、鳴くか、

作者は、詩人として、文字に
對して鈍感である）では無く
野蟲が無くから、必然的に
か淋しくなるのであらねばな
らぬ。
日米、十月十日春峰氏。
「手術」？ 苦悶？
俺達はその處に血を見た。
と、説明を二、三繰り返して

居るが、詩として表現する場
合は「其處に血は流れて居た
」の描寫であらねばならぬ。
其上此の詩の題「手術」？ 苦
悶？」は「？」が蛇足である

併も作者の見た血は、手術ミ
プロの血ミ混合して居て詩ミ
しても、思想ミしても空虚な
矛盾である。こうなつては、
作者の感傷は、混亂以上の破
綻なのである。

移民地の小さき環境の詩人
ミして一脈の生命を繋ぐ積り
で書いたミすれば、總て、こ
の作者は、苦痛ミ、矛盾ミ、
自己嫌惡を覺へるに相異な
い。自己獨得の何物もない。

日米、十月十日
「訪問」秋野タゴ作氏
今晩は田舎の働きの人
ふさはしくない闇だ
しかし諸君、

五行——飛んで
秋の葡萄園の月光の晩に！
此の詩は、表現形式から言
へば、詩より散文に近い。そ
れは別として、二行目に「ふ
さはしくない闇だ」と言つて

「しかし」で呼掛けてはるる
が「月光の晩にお訪づれて」
ミ、續けてるるのは、さうし
ても、不思議な現象であるミ
言はざるを得ぬ「今晩は……
やみだ 月光のぼん……」は
作者が如何に辯明しても、無
意味だ、作者の意欲、夜、や

み、月、コホロギ、キャンプ
日曜、おやぢ、女——等々、
無數な叙景が、まるで、表現
派の文藝見たいに渦巻きなつ
てる歌作である。作者は、
秋の感じを直に、コホロギ、
月で聯想させやうとするのは
感心しない、コホロギや、月
が、秋の全部でない事を知ら
ねばならぬと思ふ。

日米 十月三日

「灰色の花」加川文二氏

之の詩位、不真面目な支離
試裂な、評しやうの無い歌作
以上の詩は、未だ會て、吾人
の目に接した例が無い、其れ
程に、加川氏としては、氏の
詩人としての價値さへも、不
可思議に信ぜられる作品であ
る。

吾人は適當な批評の言葉も
知らない位、遺憾に堪へぬが
鑑賞の結びとして、檢點し
て見やう。

今より出して見ても、その
詩は何もなく私を涙ぐませて
呉れる。

七行目に

それ故に云ひ如うのしれな
い一種の悲哀……

「X」から三行目前に

たとへばミレーのやうで
自涙ぐみ……

作者は、始め泪ぐみ、更に
嗚咽し、復かと思はせる程、
暗然と、三度迄も、悲しんで
ゐる。(それは甘酸い嬉れし
さか知らんが)、兎角、セン
チメンタルな、氣分に浸つて

讀者に、感慨を洩らしてゐる
が、之の態度たるや、實に實
に、尻尾の如くに、不可思議
な、實體でもあうか、吾人
は、少しも、作者の感情に、
同情の持てぬのみか、無分別

な、感覺描寫に、睡きたく
なる。而も、此の「X」まで
は、表題「灰色の花」さは何
等の關係も(作者は、涙を、
灰色の花にむすんだか知らん
が)無いのである。況んや、
後半に聯絡する一本の絲も無
いに於いておやである。

次に進むと、

高原のは秋淋しい
太陽は鈍い

こまいた花が咲いてゐる
低い灰色の花だ

淋しいと言へば寂しい
噫！吾人は驚かざるを得ぬ作
者の感覺は狂的であると評せ
ざるを得ぬ。

さびしいと言へば寂しい。
(さびしくないと言へば寂し
くない)

高原の秋はさびしかつたら
何處までも、高原の秋は寂し
い筈である。然るに、さびし
いと言へば……(さびしくない
と言へば……)不得要領の表
現である。

最後に
味はひきれないやうな平和
を味はうてゐる。

平和と言ふ文字は、靜的な
意味で、さびしいは、動的で
ある。作者は「平和」を「さ
びしい」の代名詞として使用し
てゐる。則ち作者の平和は、
さびしい平和である。こは、
復、妙な平和である。始めか
ら終はりまで吾人は平和なら
ず、さびしいなら、さびし
いで、満足である。

太陽を浴するの「浴す」
調和を織出すの「織り出す」
は

不適切な言葉使用である。
全部として檢討すると、更
に不分明な、技巧、形容詞が
ウヅマキの如く、吾人の美的
鑑賞を千萬丈の海底に沈める
のである。それは、行を追へ
ば、

少しも取り忙いだらしくない
それ故に云ひ如うの無い……
一種の悲哀……
何でも無いことを云ふ……
たさへばミレーの……
さびしいと言へば淋しい……
手のつけられないやうな……
花でもない花を……

味はひきれないやうな平和
……
吾人は忠實に明細に、此の
詩を批評する。そして云ふ
作者は、曾て「俺は詩人だ」
と云ふ時も發表した。又、内
在律、技巧、云々もした。が
作者の言ふ「ほんやりしてゐ
る所に、はつきりしたものを
感じその打つて来る所の……」
打て来る如何なる精神もこの
詩には無い、作者は、煙の如
く朦朧として煩に堪へぬ幾多
の非化學的な、愚にも附かぬ
文字を並べて、眞の藝術品を
遠く霞の彼方に追つてゐる。
吾人は

「作者よ、其處動くな」ミ

槍を擬して、責立てる氣は、
毛頭無いが、斯くの如く、粗
雑に、曖昧に、文字を使用さ
れては、我が根文藝術への、
惡意の投石なりと酷評を下さ
ざるを得ぬ。

◎ 吾人は此の一文の結論をな
すに當たり、我敬愛なる詩人
達に切言する。

自己の心的體驗は、何物に
も拘束されず、制限されず
有りの儘に、洗練された、
化學的文字を以て表現すべ
きである。而も、詩は、
それ自身が韻文的であらね
ばならぬ」ミ

◎ (文中、二三の作者に對し
て過激な文字あらば御恕し
を乞ふ(完))
(二七、一〇、一七)

林田氏から

連載した林田香村氏の「詩の
鑑賞」について、筆者から
左の訂正を申し出られた。
第一回の「内容律表現」は「内
容則表現」の誤り及び
「化學的」なる言葉は「科學的」
の誤りに付「化學的な文字が」
變度も出て来ますが皆「科學的」
「なのでありますから左様御訂
正御願いたします。

移民の唄

(一)

菩提寺 誠

「母と子」

藤原義江が、永年捜し求めてゐた母親に、最近めぐり會つたさうだ。
幾度となく、母のニセ者が騙されて、生死の程も辨らぬ母の面影をしのぶ義江の心を憐れまし

男と手に手を執つて家庭から飛去る人妻のいまいましい事件を、餘りに多く耳にする、夫婦が、夫婦の生活から別れ離れゆくには、その間に、複雑な理由が潜

どう定めるか。どう教育してゆくか。だけである。先日、去つた女に、未練の残るある男が、ありとあらゆる手段方法を講じて、女の生活の道を潰しにかかつた。
女の働きの先きを脅かしたり泊つてゐるホテルに探偵を踏み込ましたり。移民官を送つたり。惨々に生を苦しめた。なぜ、立派に別れた女を苦しめ、憐れま

は、その子供が生長して一人前に社會を、両親を客観し、批判する頃になつた時に、母の若い幼年の魂が、偶をおしへてゐた父に對して、父の母への行動母と父の醜い争ひに向つて、どう離れかた。さうした十年、十五年の後に於て、尙をかつ、父の父たる權威が、果して認められるだらうか。
○ ○
母は子を、何物にも勝つて愛する同時に、戀愛は總てを盲目にする。そこに矛盾がある。ど

うしやうもない矛盾だ。
戀愛は常に古臭く、常に新鮮な問題たる價値を失はぬ。
神田アヤ子の事件などは、在米同胞社會の裏通りを歩く新派悲劇だ。
神田マリ子を射殺しない迄も第二、第三、第四の旗本の出現が、未だ未だ、我同胞社會の欠陥に巢喰つてゐる。とみなくはなるまい。
不景氣な世の中だ。貧乏が原因したり、戀愛や思想感情の溝がいろいろな形で悲劇を生しめるだらう。我が同胞社會ではないか。それは、諸君の近隣の誰彼に想像の矢を放つてみれば判る

移民の唄

(三)

菩提寺 誠

最後のもの

ボツカチオの或る短篇小説に一人の騎士が美女に言ひ寄る。その聲容れられず。騎士は一切の財産を使ひ果し、今は、一羽の鷹を持つのみ。
或る日、かの美女、子供を伴なつて、うらぶれたる騎士の館を訪ねる。もてなすべき何物もない、騎士は終にかの愛鷹を料

理して、彼の女を養つた。食つて、美女切に乞ふて、少年が彼の鷹を買ひ求めたき述べ。既に料理して鷹はなし。それを聞き美女は騎士の心盡しに深く感動して、永年の思ひをこの一羽に騎士は晴らすことが出来たと。
× × ×
誰でも、必ずや、處生上の決心があらう。失敗もあらう。が

失敗に處する鷹を蓄へてゐるであらうか。
× × ×
上海事件は、支那も、日本も鷹を無茶苦茶に使ひ殺した。共に失敗した。
が日本は、滿洲問題で、幾匹かの鷹を持つてゐる筈。
滿洲が獨立する。總て國家として、日本は滿洲を承認するだらう。日本は頭として鷹が弱いままか違へば聯盟を脱退するだけの切れだ、實に偉大なる鷹である。戦争をも辭せない鷹でそれはある。
國際聯盟も鷹を持つてゐるかも知れぬ。「ボイカット」などもその一つ。

米國にしてもそうだ。とスチムソン國務卿がしきりと米國民を囂ます。
國家も、社會も、必ずや、一匹以上の鷹の用意はあらう。でなくては、戦争も、平和も、来まい。秩序も安寧も保てまい。これは、人生に、生活に、個人について言ひ得る。
運命が一轉するには、かかる鷹が必要だ。
× × ×
世は不景氣だ。その聲は餘りに喧ましい。實際、我が羅府東一街でも、經營破で呻吟してゐる商店があるにちがひない。在米同胞の裡にも、ぼつ／＼失業のドン底に放浪する憐れな

ルンペン群が蠢動し始めて來た彼等生活苦に悶へ苦しむ人達を救ふ鷹を、社會は、米國の政治家、經濟家は、どうやら持ち合はさぬらしい。
× × ×
我々が鷹と信じる鷹は、腐つてゐる。蛆が湧いてゐる鷹だ。
一文の蓄へなく、何等の技術なく、生活能力を缺く人々に、更に、金鷹資本主義帝國の行き詰まりを認識する才能がないならば、彼等は何處へだ。
人言ふ。自力更生と意一持たざるものは、鷹の嘆きである。

移民の唄

(四)

菩提寺 誠

娘

ハムレット「ソチに娘があるか。」

ボロニヤス「ハイ。一人娘が。」
ハムレット「あまり外に出すなよ。知識にふくらむのはよいが、お腹が、ふくると困るぞ氣をつけるがよい。」

一時、渡米青年と第二世米國生れの間が融和を缺く。と識者の議題になつたことがあつた。間もなく、日本語學園の存続問題が持ち上つた。

渡米青年が、第二世娘と新婚家庭を創つて、仲のいいのが増へて來たので、識者の頭痛の種も一つ減り
アメリカ生れが、白人社會への進出、その他に日本人といふ自覺を餘儀なくされてくると、語學園問題も熱を凝めてしまつた。

當今は、圓相場買ひに、小金の無い第一世老人組は、第二世の爲に買つてゐた美田に腰を据て、子女の生長を楽しみ乍ら半永住と決めた人が多いらしい。

で、私は、養老院にゆかなく
て濟む第一世諸氏の子女を觀察
して、ハムレットの言葉に徴し
て、第二世娘さん達に觸れてみ
る。

東一街角には、ユコリヤ、
ギタを拘えてだみ聲で、性の
叫びを擧げてゐる第二世不良徴
發組をみい出すであらう。

彼等、乃至、彼等のグループ
をなす年輩の青少年の多くは、
三人、五人、と集團的に語り騒
ぐ様は、善良なる意義ある話題
に打興じてゐる有様ではなく、
實に、スポーツの男らしい昂奮
が、娘を對象に映じて熱を揚げ
てゐるかの状態だ。

それは第一世も同様に、四五
人が談合した場合、多くは落ち
行く話の先きが、尾籠な話か、
ある。

獨談に過ぎなくなるに似てゐる
自由主義的教育の米國だ。男
女「共學の米國」である。

圖書館は、彼等の欲する智識
を望むままに與へて呉れる、活
動、公園、海濱、山登り、あら
ゆる機會、場所が、家庭を出づ
れば、直に自由を尋べる波止場
である。第二世の生活感情は、
言葉を、思想を、時代、國家を
異にする第一世の親達から完全
に隔離されてゐるのである。

最近私は田舎を旅して、青少
年の醜態なる場面を三四度、白
晝の見聞記に終めて、我ながら
あきれ果てしまつた。

罪、親にあり。とも、子にあ
り。とも社會にあるとも、私は
言はぬ。只、時まさに初秋であ
るに係はらず、彼等は常に春の
情熱に酔つてゐるといふまでで
ある。

移民の唄

CID

菩提寺 誠

教訓

少年の頃、私は、犬が後の片
足を擡げて小便を催してゐるの
を観て吃驚した。

「なぜ、犬は片足を擡げて小
便をするんだらう」
その不思議な謎を、或る時伯
母に訊ねた。

「昔、犬の足は三本しかなか
つた。ところが、ある時に、暇

ら偉大なる有難い存在を識り、
不慮なものに對する感情の美し
い流れを感じた。

更に私は、犬について次の發
見をした。

後の片足を擡げないで小便を
する犬がある。私は青春を識る
頃であつたので、それが犬のメ
スであるのが間もなく判つた。
同時に、伯母の言葉が、微苦
笑の裡に憶も出された。

弘法大師が犬の牡にだけ片足
を授けた。とは奇怪な訓へに違
ひないのだが。

而し、アメリカに來て、スク
ールボーイに遣入つて、その家

の犬も片足を擡げる牡と識り、
基督教信者の米人の家庭には、
弘法大師が何等の對象でないの
を識た。その時、私の神への信
仰は疑問に陥つた。

教訓とはなにか。
私は、今、伯母の訓へについ
て考へてみる。

教訓は、眞實であらねばなら
ぬか。
何故に、それが嘘であつては
ならぬか。

總てのものに、理外の理があ
り、不文律がある。
時と場合によつては、嘘も眞
理以上の効果がある。

する嘘を今日言へど、誰か推稱
せんやだ。あつたやうに
三月様に、効果を出つての嘘に
私は感心しない。

それは、心ならぬ偽りでなく
て、意識して愛を注人する誨へ
であるからだ。

罪のある嘘、罪のない嘘、罪
のない眞實、罪のある眞實。
世上眞實として、社會の矛盾
組織の缺陷を思想家、宗教家、
教育家、或は共產黨員その他が
指摘し論議する。

がそれは、嘘でも、眞實でも
あるまい。人生の夢判斷に過ぎ
なからう。

菩提寺
誠

生バカをみる妻がある
 軍營倉に這入つた兵士みたひ
 に一生奴隸的な務を強ひられる
 不幸な妻もある
 申には、ブレーキの外れた自動
 車みたひに、縦横にあはれ廻
 つて衝突したり、顛覆したり、
 人を轢き逃ける妻がある
 勳章、名譽、或ひは不名譽、
 この大の食ひものは、誰でも欲
 しい者はいつても貰へるものだ
 只、勳章や、年金を目的にし
 たり、食ひものにして愉快がる
 人子が愚の骨頂であるといふま
 である
 一人の指揮者が、死人の山を
 築き、百人を不名譽にする
 考へると、兵士の生命も、妻
 の不幸も、運命のたはむれに
 過ぎない
 (完)

移民の唄

(五)

菩提寺 誠

勳章論

上海事變は、個人的に幾多の悲喜劇を演じ、様々な教訓を我等に與へて呉れた

爆弾三勇士などは、大和魂の發露として、死は鴻毛よりも輕しの譽へに洩れず、その譽は日本全國民の讃稱の的となつた。實に立派な心構への兵士達であつた

茲に一つ私は考へてみる。腕を打ち貫かれたり、腕をもが

れたりしても勳章も年金も戴かず、あたら青春から永き一生を棒にして、廢疾を嘆き憐む世に忘れられた勇士があらはしないか

果してないと言ひ張れやうか死して護國の鬼となる。それが大和魂であるならば、佛國にもこんな話がある

佛國の一兵士が、進軍の途、將に死なんとしてもがく一ドイツ兵士を戦場に發見した。憎きこの敵とばかりに、銃剣をひら

めかして胸元目がけて一突きにしやうと身構へた。その刹那に息絶え、の兵士が銃剣の許から「お母さん、お母さん」と微かに叫ぶ

ハツとして氣を奪はれた佛兵は、銃を投げてドイツ兵士を抱き起した

敵兵の死迫る蒼白の唇から洩れる一語一語を拾ふ

「よし、お前のお母さんにお前の胸に抱きしめてゐる母と妹の寫眞と、お前の死の狀態を、戦ひがすんだら、くわしく知らせ上げやう」

大和魂とは、敵に塩を恵み、熊谷が救ふ美談であり、國家が救へる死の命令だ軍人の大和魂の量、有無を報告するのが、例の勳章と云つて胸にブラ下るもの

戰場に屍を曝せば、無形の名譽を國家が拂ふ

勳章や名譽は、單に軍人に限らぬ、社會の人格者も、金持もさうである

これは家庭にも當用まる。家庭が平和であれば論はない。争議内亂が起つて始めて妻の手柄が判る

併し日本家庭では、多くの場合妻が負るべくされてゐる離婚、それは妻が與へられる勳章だ。更に年金の附く場合もある

生バカをみる妻がある重寶倉に這入つた兵士みたひに一生奴隸的な務を強ひられる不幸な妻もある

中には、ブレイキの外れた自動車みたひに、縦横にあれば廻つて衝突したり、顛覆したり、人を轢き逃ける妻がある

勳章、名譽、或ひは不名譽、この大の食ひものは、誰でも欲しい者はいつでも貰へるものだし、勳章や、年金を目的にしたり、食ひものにして愉快がる人子が愚の骨頂であるといふまでである

一人の指揮者が、死人の山を築き、百人を不名譽にする考へると、兵士の生命も、妻の幸不幸も、運命のたはむれに過ぎない

(完)

信子の純清

(二) 林 田 香 村

女流提琴家の、オグデン、ビーヤスがエクトル、ベルツォーブの幻想スイムフォニオンを、彼女獨特の技巧と洗練されたる新演奏を以て奏し終はると、落雷の丁撃にも似た急激の喝采が満座に溢る、觀衆を壓して一時に沸きたつた雪雄はすっかり彼女に眩惑されて感慨に興奮した顔を、あだかも初恋の乙女が熱烈な想ひに己れが半身を戀人の胸に寄せ、深刻にも心臓を裂き貫く血汐と血潮の脈管を縫ひ合はすが如き、弾力に満ちた抱擁に陶醉する感情のクライマックスで、舞臺面に目惚れてゐた。

アンコールによつて再び舞臺に表はれた、彼女は、万燭のスポットライトを全身に浴び、心持ち肥り身に淡黄色の薄絹を纏ひ、燦然と輝く無數の寶石の反射を、震ふが如く八方に撒き散らしながら藝術家特有とも稱すべき、驚く程鋭い大きき碧瞳を輝かして、バルコニーの頂上から、メーンフロアの隅々迄も、片頬の笑を平均に投げ與へ、晴れやかか、而も熱のある女性らしい聲で、二言三言アンコールに對する挨拶をかしめて引き込んだ、觀衆は再びどよめこうとしたが、次の瞬間、バット明るくかつた。雪雄は熱病患者の持つ恐ろしい悲鳴の様か、もうろうつした無意識な情態が、恐らくは人前が持ち得るだらうところの最高の藝術的な能の感慨に導かれた。觀客の一人一人が丁度雪雄の持つるれに等しい興奮に熱し切つてゐた

雪雄は幕合の數分間を息抜きにあちこち見まわした、丁度雪雄はロッヂの一番前列に席を取つた居たので、腰を半分滑らして幾分前かどみになりさへすれば思ふ儘階下の前半が面白くのぞく事が出来た、雪雄は管絃樂の指揮者が兩手を舉げたり、擴げたりする變に巨体をゆすぶる様を愉快に眺めたり右側のボックスには日本人青年が白人紳士や婦人連の中にノホホンと座して如何にも平氣らしく田舎者らしさを現出して居るのに滑稽味を感じて噴き出したくある氣持をたゞしのんで居たり、反對側に觀衆を強迫するやうに張り出された日の丸の旗に長い間の下積から逃がれた時の氣輕さの喜びを感じたりして、始めて劇場らしい觀劇氣分に浸る事が出来た。

雪雄が前屈みに見下ろした、鳥瞰圖には、遠くから窓越しに接吻の場面を目撃する様な陽氣を畫が幾つともかく、浮彫りにされて居た、清淨純潔其ものゝ様か乙女が母親らしい婦人に話しかけて居るのや、新婚後間もかからう「あゝさつと目蓋を熱くして居るな」どちよつと變な氣持にさそわれるのや、おやおやと感歎詞を投げてやりたい様な頭の禿げ上つた男が驚きが今羽を擴げたばかりだと言ふ風に肥つた片手を年程も異ふ若い妻君若い女の肩から抱込む様に女の顔をのぞき込んで居るのが一杯列をかして並んでゐた。

雪雄が、俺れも相手が欲しいなあどつとふやいた瞬間「アッ」と胸をしたがが突かれて息づまる思ひの大きき驚駭と亂心に似た、心の動搖にあやうく我を忘れやうとし

た。雪雄は氷水を飲ませられた者の様に神經といふ神經が固くあつて仕舞つたが、次の一瞬、雪雄が何か眼の錯覺ではあかつたかと疑ふ程の此の偶然の出來事で總ての感覺を超越した階下の日本婦人を見た感動に對して、再び敏捷な躍を落した、繁々と見守れば、見守る程、どうしても信子に異なかいと承諾せねばならなかつた。

信子は三年前に兩親に連れられ日本に歸つた筈だつた。そして雪雄の幼な友達である信子は、又悲しい初恋の女性であつたのだ。雪雄は胸の動悸が烈しくなり顔面が甚だしく紅潮して來た、夫と思はれる青年と並んだ且の婦人は疑へば疑ふ程細かい點まで彼女をつくりだつた。

雪雄は惡夢から醒めた様に次第に意識が明瞭にあつて、過ぎし日の信子が、あつかしくあつて來た信子が今頃羅府に居る筈がない雪雄は打ち消さうとして、五年前に彼れが書齋の二階の窓から、學校歸への信子のあどけない姿を毎日眺めて過ごした事を彷彿さした、其の信子の姿、其儘を階下の

人は「他人の空ら似」として何氣なく片附け去る事は、出来なかつた。

此の階下の信子其儘を豐滿な肉体の勝利者が、夢を夢見る者の如く、雪雄を五年前に引きもどした

其頃雪雄は、母子二人北米の父の仕送りで、極く單純な静かな生活を續けてゐた。雪雄が中學を卒へる頃渡米せよといふ父の手紙を幾回も幾回も受取つた、けれど雪雄

の目の前には、海軍士官の晴れやかな姿が、高價を金剛石見たいに大條の線であら下げられてゐた。すつかり雪雄は其光りに眩惑させられた、而して渡米に迷つて居た丁度其頃二三里離れた小さい町に住んで居た、信子が母に伴はれて祖先の墓参りかたぐ、彼の母を訪ねて一泊する事にあつた。

柔順で化粧もした事のない十六才に足らぬ信子と母子四人が食後角火鉢を圍んで色々な雑談を交はして居た、雪雄は火鉢の上にかざした細つそりした信子の手を握つては爪をいちつて其の氣持に満足してゐた、突然信子の母が側面に微笑を湛えて純白の齒並を見せながら「雪雄さんもアメリカに來るのよ、ね、そうしたらうちの信子をやりますよ」と言つて二人の顔を等分に見くらべた。

雪雄は赫つとなつた、同時に信子も急に手首を縮めて耳の根元まで眞赤になつてしまつた。

兄妹の親密さで成長した二人は其

後戀人としての愛に變つた。

雪雄が海軍士官や、華族の令嬢の夢の熱が消へて半年の後には、桑港の客舎に、新しい夢を嚙んで居た、桑港の雪雄と長濱の信子は始終戀の文通をした、だがうしろたブラトニツクなラブも終りが來た、間もなく故郷に残された雪雄の母は遠く肉親の子の看護もせず世界してしまつた、信子は一ヶ年半足らずの生活起線を作つて移民地を後にせねばならなかつた、彼女と女の両親は一人娘を移民地に住ませたくなかつた。

或日信子は純清を捧げる體で海を隔てゝ別れねばならぬ様になつた時淋しい手紙を雪雄に送つた「私は毎夜々々裏庭の大きなアカシアの木の下で愛する雪雄さん」と叫び泣きながら悲しい戀の別れをかこつてゐます。

私は私の瞳の晶さに此のアカシアの木の上に「私の雪雄さん」と彫りつけてゐます、それが私がアメリカを去る唯一の片身です、せめてもの慰めです、此地を離る日迄毎日毎夜この木を戀しつゝ雪雄さんと前に泣くでせう」

雪雄は信子の父に對する犠牲的精神が哀れにも尊く思はれた。

雪雄が大きく深く息を吸つてから洵燦な裝飾をされた天井に向つて細く靜かに吐いた時は自然的に觀衆の息に合した。

雪雄は王子に扮した美男の雪州の舞臺姿も眼に映らなかつた更にピストルの音さへ、ポカンと聞いた雪雄の心は遠く舞臺を離れて幻想の中を泳ぎ廻つた。

信子の姿が……愛する雪雄さんのアカシア樹に早變りした、走馬燈の如く頭が極度に混亂した。

うと、あせつたが、結局、無駄骨だつた、流れ出る人波の中に、同じ流行服の婦人の群を一つ一つ見分けるの困難さは想像に餘りがあつた、

雪雄は街上に、信子を見出さず幾分失望を感じたが、明朝アカシア樹を確めやうと云ふ氣持が、取り込んでゐたので、地上を一杯眼つぶしに冷たい霧がはい回つて居るのを氣にしあがらも家に急いだ

「噫、信子、信子」

雪雄は夜つビタ寢返へりを打つては熱い涙をボロボロ流した、少し空が明み始めるや直ぐ飛起きて昔のせぬ様に、氣を揉みながら長い長い朝食の六時を待つた。

信子の純清

(三) 林田 香村

雪雄は羅府から長濱迄の一時間を全速力で飛ばすと、漸く見附け出した、曾て信子の住家だつた一丁手前に車を止めた。

雪雄はハタと困つた事によつてしまつた、と言ふのは今其の家に住んで居るだらう人に、何と尋ねて裏庭の樹を確めてよいか、雪雄は何と口實を作つて見やうかを思ひ悩んだが、名案が浮はなかつた「エーかうもんか」と言ふ氣持がつい足を運ばせた、雪雄は番地を調べてドライブウェイを馬鹿落附を見せて歩いたが、不思議にも左程廣くもない裏庭には木らしい木は、一本もあかつた、枯れかゝつた草や車庫を建てたのらしい本片が、彼等此所に散らばつて居る許りだつた。

雪雄は「おかしいな」と獨言を吐き出した、裏の入口の階段を踏んだ女主人らしい聲が、子供を叱る聲かして、裏に出て來るまで、雪雄は「馬鹿見た、來ねば良かつたに」と尻込みした。

「今日は」
雪雄は女主人が出て來た前に言葉かけた。

「いらつしやいませ」
やさしい女の聲が続けて聞へた「どなたでございますでせう」
馬鹿に彼女の聲が信子に等しか

「ナニそれやお互ですよ」

しても此アーケシャの樹は切つて
はいけまいと歎願する様に頼みま
すし、叔母もそれとなく言ひまし
たので、長い月前からグララヂを
建てるといふ夫を思ひ止めてゐま
したがつい一ヶ月前に」

雪雄は無理矢鱈に連れ歸へられた。信子が、此の字を毎夜僅かゝ時間少しづつ彫つて行く姿を、思ひ浮へてひとりでに熱くなつて來た、雪雄は自分の横に立つて、無言の儘眺めてゐる此の信子の從姉に厚

い感謝の心が沸いて来た。

「どうも有り難う御座いました」

「本當に私も嬉しう御座いますわ」

「戴いても」

雪雄は彼女を一目見て言つた。

「エー、私から御願ひいたしますわ」

彼女は間を置いて言つた。

「日本の方に早く知らして上げませう」

雪雄は彼女の心やりが信子の姉らしく思はれた。

雪雄は茶を一杯召し上つてと言はれるのを謝絶して一枚の名刺を残して古疵に觸れる様を、彼女の質問の矢を逃れやうとあせつた。

雪雄はアカレア樹の三尺を肩にかつぐと一丁の歩道を急いだ。

車に積んでもう一度彫刻を眺めた「私の雪雄」雪雄は口の中で幾度も繰返した。

「歸つたら本箱の横に立てかけやう」

雪雄は獨言を呟くと無上の嬉しさに大聲で鼻唄でも放ちたくなる氣

持を笑ひながら、自動車を徐行させた。

雪雄の片足は、完全に靴裏を外に向けて扉の上に載せられてゐた。

(完)

詩壇歌壇

見た儘

エイチケー生

私は最近の新聞文藝欄から目を離さぬ一人だ。羅府新報の革命的なみ換へ土臺にして内實共今後立派になつて行くだらう詩壇にも歌壇にも新しい作家、若い方々が出るだらうと希望してゐる。同時に放浪の詩集同人も皆健在振りを時折見にかけてもらいたい。私は今順次に十一月十八日及び二十四日の詩歌について一言私の思ふまゝに評さして戴きたい。全然評者は個人の好惡感と與へずにいふつもりです。

詩壇、最初に嶺南氏、氏は私が敬意を表する一人の南加の詩人だ。十八時の「さびしき心」は氏の人生觀なり、自然觀なり思想的歩みの一歩がうかがわれる。秋の曇日を思はせるやうな静かな哀の詩だ。私は嶺南氏は民謡、童謡にもつともつと立派な境地がありはせぬかと思ふ。氏はあの詩に氷鏡を眺めるやうなあきらめ感にしたいだらうか。あきら氏、詩三抒情章氏は可なりの他血質だ。(喜意味での)誰れでも多情多感に異でないが氏の感性的考現も悪くはない。而して私は三つの内の「泉」より「ロー」してはいけな

「アンズの樹」が好きだ。氏の心詩が浮き出てゐる。私アキラ氏にこのアンズの樹を今後注文する。あきら氏は詩作するなら多作より一本調子が大切だ瞬間の詩感に壯麗だ。

今泉涙草氏「詩の書けぬ夜」はすなほに描かれた散文詩だ。今少し深刻な詩は生れぬかな。私はそれがほしい。

濱野白洋氏の「秋のゆめ」は私にフレッシュな感じを與へるゆつたりしてゐる。それに又不思議とシャープな所がある今の心境にわたる良い詩が書ける筈だ。氏はテクニクがあるがそれを

詩壇歌壇

見た儘(下)

エイチケー生

野田良氏、私にはまだ若い方に思へるが。

「秋」はかなりの詩だ、だが手法も見方も詩味があるやうで少し無理だ。

「羅府の雨」もそうだ。民謡のやうで民謡にしては堅

すぎるといふ。だからといつて詩でないとはいへぬ。古いリズムは氣にかゝる真面目に見へても幼稚だ。もう少し改めねば全体としての美しい氣分が出来る。

「南詠會を中心」に感心なものだ、しかしこれ迄

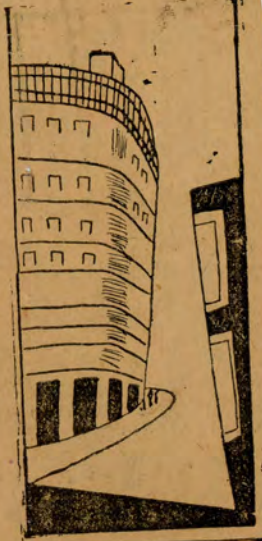
の泥草氏や良彦氏の努力を私は多とする。南加には余り若い方、新しい歌人は殘念ながら出さうにないやうだ。歌壇には女流作家の多いのはどうしたことだらう。兒玉紫青 柴田畔花、住井壽香の諸氏は比較的新しい方のやうだ。私の觀察異るかも知ら。南詠會歌人の名を時折母國の色々な短歌雑誌に見ることがある。伊勢田初枝氏の名だつたか最近の短歌雑誌にあつたと記憶する。

私は歌を詠み得ぬが打角わが南加の歌人同人の發展を心から祈る。同時に早く歌集出版の日の来ることを切望する。

「俳壇」私は常石芝青氏や櫻井銀鳥氏のいつか其内に目にかゝつて教へて貰いたいのです。渡米當時はバークレーの山の上で獨り加大の塔を眺めて句をつてゐました。が今話したら文子通りお笑ひ草になることだらう。私は何より俳句を作ることは六つが敷しい。

最後に南加に一つのまとまつた同人雑誌の出てもよい筈だと思ふが宵村氏等に相談を持ちかけたいな。出目だが悪からず諸君の許しを乞ふ。(完)

十一月二十七日



客なドン キホーテ

【ハ】

林田 盛雄

それから半年も経たぬ秋の午後、私は百貨店で雑品を求めてゐた。ふと傍らを振り向いて、女店員と口論してゐるのを覗くと、その客は、まぎれもない、先日、私共の店に來たトメト夫人だつた。「十五仙の買物に一仙の賤賣税とはけしからん」といふのがトメト夫人。他の店では徴收せぬ、と頑張るのである。「始めなすつたな」と私は苦々しく眺めてゐた。

やがては自分が持つ物にすゝるものにさへ、何か一言、客な根性を述べずには居られないらしい。この女の性癖を、私はノバシてやりたく思つた。併し、顧みると、文藝の士にも斯の如き客なドン キホーテの多いことである。

變な宗匠氣ぶりや、誰にでも一言喧嘩を吹きかけるのや

ら、理屈も、事理も解しないで、非常識にも、高飛車の暴論をする手合を、何とまあ、恥知らずに放言出来るものだらう」と眺めるのである。

殊に、それが一角の理論めいてくると、私共は、その客な根性に沈黙を守る以外に道はないのである。

(一九三三、九、二〇)

(日曜日)

日一十月三年九和昭

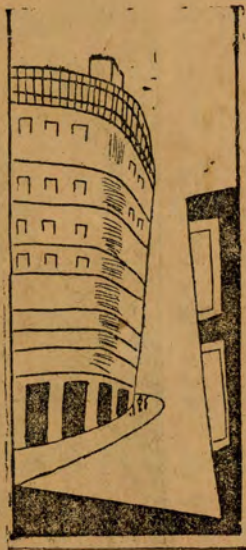
【四】

一デンサ

←日毎

文藝

三月第二輯



客なドン キホーテ

【イ】

林田 盛雄

唇を眞紅につけた金髪で年増美人が、三斤十仙、一斤五仙の標示をしたトメトの前に艶姿を顯はした。

「一斤半呉れ」彼の女は「一丁にさう命じた。」

「チヨ！ジは一斤半を量つて七仙戴きます」と掌をさし延べた。

「五仙ぢやないか」彼の女は頑強に拒んだ。

「ノウ、七仙です」暫らくして彼の女とチヨの押し問答は段々と言葉が亂れて來た。聴て店内に兩人大聲が揉み合ひ始めた。

餘り聞き苦しいので私は兩人の側から言葉をかけた。「御婦人、この標示の價格を見て下さい」

唇を眞紅につけた金髪で年増美人が、三斤十仙、一斤五仙の標示をしたトメトの前に艶姿を顯はした。

「一斤半呉れ」彼の女は「一丁にさう命じた。」

「チヨ！ジは一斤半を量つて七仙戴きます」と掌をさし延べた。

「五仙ぢやないか」彼の女は頑強に拒んだ。

「ノウ、七仙です」暫らくして彼の女とチヨの押し問答は段々と言葉が亂れて來た。聴て店内に兩人大聲が揉み合ひ始めた。

餘り聞き苦しいので私は兩人の側から言葉をかけた。「御婦人、この標示の價格を見て下さい」

私は七仙支拂つて店を出たそれから二三日後に店主が來て私共三人の店員を一人づつ呼びつけて訓戒を與へた。

「大へんお客當りが悪いさうだ」と、三人に説明されて他のお客の物笑ひになつた彼の女は雜貨店の支配人に勝手なことを話し、支配人同道で書記に、書記から總支配人、白人店主、それから私共の野菜部のボースと、まあ不平が傳へられた譯だと後に判つた。私共は開いた口が塞がらなかつた。

藝文



文學の

廻り舞臺

(AS) 多田 一 郎

在米同胞を背景にする小説である以上は、その小説の背景に、同胞の生活環境といひ、態度といひ、その心境が刻明に表現されてゐればゐる程に我々の興味を惹く。その點から観るならば、深草君の小説は、羅新の決裂も、加毎の或る拾得物も共に刻明の一言に盡きる。「不孝者」の大作、八重子

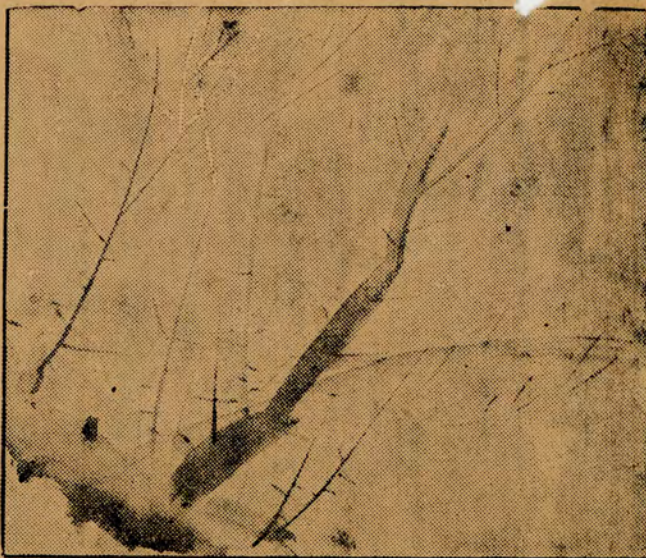
何をしてゐるのか、青年讀者は何の職業をいかに働いてゐるのか、甚だ漠然たるものを感ずる。生活背景を表現することは在米同胞を背景とするハルデキヤツプの下では、當然、要求される筋合のものである。

小説らしい小説の筆を運んでゐると思へたのが、深草君の加毎、羅新の二作である。

「決裂は」緻密である。「或る拾得物は」一貫して流ら削りである。この二作は、いひ、人物の配置、餘りにも類似的な構構。マンネリズムの一步前に墜ちなければ作者は幸ひだと悲口さへ出るかも知れぬ。決裂の梶川——拾得物のS老人。松方——中田のミセス富子——美佐子。アヒルの卵と、ニワトリの卵を一緒にして一羽の鶏に抱かして喜んでゐるやうなものである。

悲しみと云ふものが「時の慈悲に、病人に與へられる強壯劑の葡萄酒か何かのやうに思ふまゝに薄められるものだつたら、ドンナに人間は仕合はせだらう」と作者は決裂で言つてゐる。この言葉が板についてゐる。これだけの連懷を松乃に言はせる作者の手腕を私は買つてやりたい。尤も「明日からお前も吞氣ぢやけん」といつて、これからは夕方には早仕舞も出来やうし、朝もゆつくり休まれようと、貧乏人の贅澤は嫁貰ふてから樂にする。ことだなどとおよそ久しぶりのほがらかさだつた。八重子もつひのせられて「長生はしたいものよね」と氣樂さうにいふと、大作は病人のくせに家がわれる様な大きな聲で笑つて「けんど嫁いぢめだけはするなよー今度は夫婦で聲を揃へて笑つた。」以上のやうな躍する描寫が「不孝者」には隨所に溢れてゐる。感情自然から現實の流水に悼さしてゐる長尾君と、

文 藝



廻り舞臺

(A) 多田 一郎

文 學 の

日の勝馬像と、その日の結果に血道を揚げてゐる裡に、正月は過ぎて了つた。そして、書くつもりで原稿を、どらやら、新聞の新年號小説の讀者には己に氣の抜けたであらう今日今頃持ち出すことになつた。加毎の沼田氏にも、讀者諸氏にも誠にすまない。

誰か一人位は、新年號の小説の批評を書くかと思つてゐたのに、實際驚いて了つた。人多くして、亦、人少しかたである、とも思つてみた。

僕は、この原稿を書く前にドイツの作家ハイゼの短篇小説論を読んでゐた。そして短篇小説は、腸の斷片みたいなものではなく、魚の如く頭もあり尾もあるものだと思つてゐる。

勿論、皮も、肉も、骨もあり、そこから、ウイットやユーモアが湧き出るだけの洗練さが欲しいものだと思ふ。

先づ僕は、羅新の「不幸者」長尾郁二作を慢歩する大体に、始めから終りまで描寫に無理がなく、坦々とした文章で、遠心的に寫實してゐる。

描寫と會話のつなぎ、會話を説明でうけるその客観性、共に、巧なものであるが、この小説の主人公、不幸者ば第二世青年裏次であつて、大作でも、八重でもない。

大作と八重を描寫することによつて、作者は裏次を浮き掘にした心算かも知れぬ。もしさうなら、作者の意圖は百パーセント失敗である。

作者は裏次を走らしてその影を描いてゐる。その裏次の影たるや、秋の夕べの如く戀しいものである。裏

次の性格は楯の半面にうつる影にして、この小説のなかには第二世らしい眞の性格も、人間性も、社會觀も何等立體的に描寫されてはゐない。

裏次のヤスノに對する意識表明を、マーガレットとの共同動作、並にマーガレットの八重への會話で生かしてゐるつもりらしい。がそこには、裏次の性格が、第二世青年として、普通安當性をもたない。

更に、いけないことは、裏次の心境に無理がある。大作、八重に心的つながり

を持つべき筈の裏次の感性が、何等必然的現實性を把握してゐない。

これは、どうしたものだらう。

筆に、この小説のよいと感ぜられるのは、文章が洗練され、餘裕があり、大作八重の描寫が、自然を通じて、全篇映畫的に戯曲的構成を以て書きつゞられてゐて無駄がないことである。